

ロマン主義時代における民衆と

スタンダールの民衆

——フェランテ・パラ論——

西 川 長 夫

西 川 祐 子

(一)

芸術、それはあらゆる束縛の鎖を断ち切る人間の思想である。

芸術、それはやさしい征服者だ

ラインもティベルも彼のもの

奴隸である民衆、芸術は彼等を解放する

解放された民衆、芸術は彼等を偉大にする

(ヴィクトル・ユゴー「芸術と民衆」より)

文学の主題の面から云えば、ロマン主義時代は民衆の形成過程であった。特にスタンダールの主要な小説が発表された一八二〇年代の終りから一八四〇年代にかけては、民衆に対する関心が高まり、文学における民衆の主権が確立するかのように見えた一時期があった。芸術と民衆が結びつき、文学ははじめて民衆の解放者として意識された。

識された。

何よりも大革命の影響を考えなければならないが、ロマン主義が大革命を契機としたとしても、大革命の民衆像が直ちに文学に反映したのではない。しいたげられてはいるが、未来がその手にゆだねられているクラスとしての民衆の姿が明らかにされていくのは、とりわけ一八三〇年から四八年にかけて、産業革命の進行による階級の分化に伴ってであろう。作家達は多くの場合、共和主義的あるいは人道主義的傾向を強めはじめた。ヴァン・チーゲームは次のように指摘している。

「一八三〇年以後、ゴーチェとミュッセを除くすべてのロマン派の作家たちは、みずから道徳的というよりも、社会的、人道主義的な使命をになっていると信ずるようになった。(……)」

ロマン主義は一八三〇年以後、自由主義の方向に急速に発展した。ラマルチヌは一八四五年以後、共和主義者になった。ユゴーは共和政府が樹立されるや共和主義者となり、その後、転向しな

い。政治的な活動からすつかりは身を引かなかつた人達もまた一八四九年までのジョルジュ・サンドのように社会主義者となつた。¹⁾一八三〇年、スタンダールを有頂天にさせ、ミシユレに一つの偉大な光明、祖国フランスを認めさせた七月革命の年、「エルナニ」の事件があり、「赤と黒」が出た。ラムネーの機関紙「未来」が出たのもこの年である。

「エルナニ」はどちらかといえば文学の形式の問題であつたが、形式における自由の問題は必然的に政治的自由と結びつかねばならないだろう。これに対し「赤と黒」は何よりも内容の問題であつた。ジュリアン・ソレルを構成するのは、当時の支配階級が下層階級の中に認めていたあのどつとする不気味な要素である。彼等の恐怖をサント・ブーヴが代弁している。「醜惡な、存在しうるはずのない小怪物。市井や家庭生活のもめごととに投げこまれたロベスピエールにも似た惡漢……」「未来」は民衆の矛盾に満ちた表現であつた。

ジャン・ゲーノーのようにフランスロマン主義の偉大さにすつかり魅せられて、シャトーブリアンからスタンダール、ミシユレまでを人道主義という一本の太い線で結ぼうとする見方もあるが、それではあまりにも作家の個人差を無視し、人道主義に過大な希望を寄せることになる。しかし共和主義と結びついた、人道主義の熱狂は明らかに存在したし、少くとも人々は民衆に無関心ではありえなくなつてきたことも確かである。

ペランジェやユゴーのように民衆と共にうたおうと、民衆の聲に耳をふさいで「芸術のための芸術」ととじこめようと、あるいは民衆をののしろうと、民衆を気にしないではいられない。ロマンチッ

クの一つの典型とされてきた「世紀病」の人間像にしても、民衆との關係において正しく捉えられよう。世紀病患者の不安は、彼等が民衆に属さないこと、民衆の聲に合わせることができないこと、民衆を信じえないことから来る。「民衆の聲」(voix du peuple)は流行語となつた。それは一八三〇年から四八年にかけて様々な矛盾を含みつゝ鮮かな曲線を描いて高まつていく。

民衆の側にいる作家が圧倒的に優勢なのがこの時代の特色である。ラムネー、ラマルチヌ、ユゴー、サンド、メリメ、ペランジェ、スタンダール、王党派を自称するバルザックもこちらの側に入れよう。

「願わくは、この物語がブルジョワ達の有為転変(vicissitudes bourgeois)の詩となつてくれればよいが。こうした人達の盛衰のあとなどは今まで誰も考えもしなかつたものである。それほど、そこには壯大なものが欠けているようであるが、でもやはり無限の大きさを持つている。これは単に一個の人間の物語ではなくて惱める全民衆(Le peuple)の物語なのである。」⁴⁾

バルザックは現実の民衆を描こうとしたのだが、その民衆とは彼の場合、「農民」や「ふくろう党」は別として多くはブルジョワジ―とは同義なのである。

「村の司祭」のような作品では、大商人から下層農民を含んだかたちでの民衆のユートピアづくりが描かれている。このラムネーの影響を多分に示している小説は、ロマン主義の民衆を考える場合に忘れることのできない作品である。()

民衆の理想像として、サンキュロッドを考えるのか、ピロトーのようなブルジョアを考えるのか、あるいは単に貴族と少数の特権者を除いた、農民から都市の労働者や商人、官僚までを含めて考えるのかによつて事情は非常に異なってくるはずであつたが、それは個々の作家によつて様々なちがひがあると同時に、一人の作家をとつて考えても時によつて異なり非常にあいまいである。生成の過程におけるあいまいであつた。

この時代以後、作家の主な関心事は、「民衆といかにかかわりあうか」という問題であるべきはずであつた。私達がここで「パルムの僧院」の副人物にすぎないフェランテ・パラを選ぶのは、パラこそは最もスタンダールの民衆であり、この人物のうちにスタンダールの位置が最も明白に表現されていると判断したからである。

- (1) Van Tieghem ; *Le Romantisme Français* (Que sais-je? P.112)
- (2) Sainte Beuve ; *Causeries du Lundi* (1854.19.)
- (3) Jean Guéhenno ; *Jeunesse de la France, de Montaigne à Jaurès*
- (4) Balzac ; *Histoire de la Grandeur et de la Décadence de César Birotteau.* (Classique Garnier P.57)

(11)

一八三〇年以後、フランス・ロマン主義の主要なテーマとなつた民衆とはどのようなものであつたか。彼等ロマンチックの偉大さと

優劣さ、その矛盾を代表する二人の思想家、フェリシテ・ロベール・ド・ラムネーとジュール・ミシュレを通じてそれを明らかにしたい。思想的な傾向を強めたこの時期の文学にサン・シモン、フウリエ、ピエール・ルルウ、プルードン、ルイ・ブラン等の思想家の与えた人道主義的・空想社会主義的な影響を無視することはできないが、民衆のイメージをめぐる思想的な流れの中心に位置していたのは、やはりラムネーとミシュレであらう。彼等はいずれも「民衆」を主題とする書物を書いた。

・一七八二年に生れたラムネーはスタンダールと全く同じ世代に属したが、エコール・サントラルで学んだスタンダールとちがひ、ラ・シェスネーの森の中の修道院で教育され、チボーデの表現をかりるなら、信仰以外には呼吸しうる空氣がないという生活であつた。キリスト教がロマン主義の抒情と結びつくのは、シャトブリアン以来べつに不思議はないが、ラムネーがフランス革命のモットーのうちに福音書の精神の最も完成した表現を認めたのは大きな事件である。

ナポレオンが鋭く指摘しているように、教会は常に反革命の側に立つて、暖衣飽食する人のかたわらで餓死する人々に対し、神がそれをおぼしめされるのだと説いてきた。そこに王制復古と七月王制におけるカトリックの役割もあつたが、その反動の最も手強い拠点から、彼等の思想を逆手にとつてフランス革命の理想（いかに歪められているとはいへ）にかえらうとする運動が生れてくるところに、その時代の人道主義的な運動のひろがり、民衆に対する関心の強さの一端がうかがわれる。

「ラムネーの機関紙『未来』 (L'Avenir, journal politique,

scientifique et littéraire) 1830年十月十六日に発刊され、翌年の十一月十五日まで続いた。「未来」のかかげた総領は「神と自由」(Dieu et la liberté)であった。無関心は罪であり、自由主義運動への参加を拒否した宗教界は信仰を損うものであるという主張は当然、反響をまねいた。代表作の一つ「一信者の言葉」(一八三四)は発刊になった。この書物は民衆に捧げられている。

「民衆に」

この書物はとりわけあなたのために書かれた。私はこの書物をあなたがたに捧げる。あなたがたが共にしているあの多くの不幸、やすらぎもなくあなたがたを押しひしんでいるあの苦惱のたゞ中であって、この書物が少しでもあなたがたの勇気をふるいたたせ、慰めるように。(……)

あなたがたは悪しき時代に生きている。しかしこの悪しき時代は過ぎ去るであろう。(……)

権力を乱用している連中は、嵐の日の小川の泥のようにあなたがたの前から去るであろう。その時あなたがたは善のみがながらえ得ることを知るであろう。(……)その日のためにあなたがたの魂を備えよ。遠くはない、それは近づいている。」(序文より)

植字工が版を組みながら、感動して泣いたという逸話が伝えられている。反響は大きかった。さっそく「両世界評論」が取り上げ、一週間で三千部売れたという。結局、ラムネーは教会から離れ、共和党員となり、罰金刑や投獄の経験もへて、一八四八年にはパリ国民議会の議員に選ばれている。

ラムルチーヌは「一信者の言葉」を「反乱の福音書」と批評したが、彼の闘争的な調子は「民衆の書」(一八三七)においては一層たかまっている。

「行動、行動、そして行動が必要だ。さもないと君達は永久に悲惨の中に横たわっていなければならない。」(「民衆の書」序文)

ラムネーは単に行動をせまっただけではなく、民衆の生存と自由の権利の主張からはじめて、平等を根幹とする一つの闘争的な政治学の形成に向っている。

「あなたがたが政治組織の基礎として、権利のキリスト教的平等を与えるのに成功した時、あなたがたが欲し、また神があなたがたに欲するように命じたあの復活が、三つの不可分な部分、すなわち物質的、知的、道徳的秩序の中におのずと実現されるであろう。」

(「民衆の書」十六章)

ラムネーの大きな影響下に作品を書いた人として次の名前があげられている。ヴィクトル・ユゴー、ラムルチーヌ、サント・ブーヴ、ジョルジュ・サンド、バルザック。ペランジェとの交友も知られている。(1) ミシユレは民衆の味方としてラムネー、ペランジェ、ラムルチーヌの名をあげているが、彼もまたラムネーの強い影響をうけていた。

ミシユレも生涯をつうじて民衆を描き、民衆に呼びかけた一人であ

った。歴史家ではあったが、彼もまた民衆を主人公に選んだロマンチックであった。彼は「フランス革命史」の最後の頁に次のように記している。「最初の頁から最後の頁まで、私の革命史にはたゞ一人の主人公しかいなかった。すなわち民衆である。」

一八四六年に出たミシュレの「民衆」(Le Peuple)はラムネーの「民衆の書」を受継いだとみることが出来る。民衆が抒情の対象とされたことに変りはない。最も異なっているのは神が祖国におきかえられた点である。ラムネーも「祖国に対する義務」という言葉をくりかえして使い、祖国愛を決して軽視しているのではないが、カトリック教徒として当然インターナシヨナリズムに向う。これに對しミシュレの論理と感情の根幹をなしているのは激しいナシヨナリズムである。

ミシュレは「民衆」の序文で、パリの二つの敷石の間の日の当らない雑草のようにすごした幼年時代から、この書物を書くに至るまでの精神史を記している。「労働者の時代」にあつて、かつては自分も労働者であつたという特権を持つミシュレにしてみれば、民衆を語るとは自己とその思い出を語ることであつた。そのようにして描かれた民衆像はかなり感動的ではある。

「今日しばしば民衆の抬頭とその進歩が、蛮族の侵入にたとえられている。蛮族！この言葉は私の氣に入る。私はそれを受入れる。そうだ、それは生命をもたらし、若返らせる新しい精氣にあふれている。蛮族、それは未来のローマに向つてゆっくりと歩み続ける旅人である。たしかに各世代は少しずつしか前進しないし、その歩みは死によつて止められる。しかし次の世代は更に一層の前進を続け

る。

私達蛮族は生れながらにして一つの長所をもっている。なるほど上流階級は文化(culture)を持つてゐるかもしれないが、我々はそれにはるかに優る生命力(chaleur vitale)を持つてゐる。」

蛮族(barbare)、孤立した虚弱な個人ではなく民衆は常に群をなし、強健でエネルギーに満ち、彼等の首都、未来のローマにむけて疲れを知らぬ着実な歩みを續けてゐる。ローマはやがて彼等のものになるであらう。……しかしミシュレの感受性とイマジネーションが彼をこのようなポエジーの高みに飛翔させる時、ロマンチックに共通した危険が始まる。ロマン主義時代の詩の常として、彼等の民衆は現実に対応物を見出せない架空の存在ではなかつたか。民衆の子としての自負にもかかわらず、彼は現実の民衆を実は知らなかつたのではないか。民衆という言葉はエフエクティブな要素を持つていて、元来あいまいなものであり、その曖昧さを批評してもはじまらないが、問題は彼等の民衆の背後にある現実認識のあいまいさであつた。

この現実の關係のあいまいな把握から出てきた詩的な飛躍が、文学における共和主義と人道主義を支え、二月革命の挫折によつてもろくも崩壊した民衆熱の正体ではなかつたか。だが、それにもかゝらず、あるいはそれ故に分裂して力を弱めることなく、それは巾広い政治的勢力となりえた。

「民衆」の第一部の各章の表題はいずれも「奴隸の状態」という言葉ではじまつてゐる。民衆の悲惨な状態を描写することによつて社会の不正を告発する意図はラムネーと同じである。

この部分はまた一種の階級論でもある。ミシュレによれば最下層に農民 (peysan) が位置し、職人 (ouvrier)・製造業者 (fabricant) 商人 (marchand)・公務員 (fonctionnaire)・ブルジョワの順番で並ぶ。しかし民衆の厳密な分析はなされていない。多くの場合、農民と職人の階級に熱烈な愛情と共感を示して、彼等を民衆と呼んでいるが、時にはブルジョワまでも含めて民衆としている。この場合には民衆は国民とほとんど同義になる。

ミシュレの階級論の軸になっているのは、経済的關係ではなくて、心理的關係である。産業革命の進捗とともにようやく抬頭しつつある労働者階級、七月革命の勝利をかちとりながら悲惨な状況におかれている下層階級、ミシュレの関心と同情がここに向けられていることは確かである。しかし、もう一つミシュレをかりたてて「民衆」を書かせた理由があつた。祖国フランスに対する危機意識から発するナショナリズムである。

「私の光、私は誤らないであろうが、それはフランスである。これらの人々と階級を判断する私の尺度は、フランス人としての感情、祖国にたいする市民の忠誠である。」(P.163)

ここにはスタンダールが書いている一七九四年のナショナリズムの復活がある。

「我々の内裡の真けんな感情はすべて次のイデーに集中していた。祖国に役立つこと。」⁽³⁾

ミシュレの意識ではそれは復活であつたであろうが、客観的に見れば非常に異なつたものになつていた。第一にフランス革命が最も尖鋭化した時、いわゆる恐怖政治の時代に祖国に忠誠を誓うことと、銀行家が支配する時代に忠誠を誓うのとは同じではありえない。第二に、スタンダールのナショナリズムは何よりも革命をおし進める性質のものであつた。専制政治に組する権力者は別として、世界の民衆はフランスの民衆と同様に革命をまちがわれているのだという確信に支えられた、インタナショナルを含んだナショナリズムであつた。これに対し、フランスの国際的な地位の低下を背景にしたミシュレのナショナリズムは排他的で神がかり的な面が表面に出てきている。⁽⁴⁾

ミシュレは民族意識、祖国にたいする忠誠の強度に従つて階級を分類した。

「民族意識 (Sentiment national) の見地から云えば、人々は上の階級に近づくと無気力になるように思われる。」(P.166)

農民、職人、製造業者、商人、公務員、ブルジョワ、この順序で愛国心は弱くなる。これは母なる大地から遠ざかる順序でもあつた。この順番で物質的な隷属の状態は弱くなり、エゴイズムと精神的隷属が強くなる。(ラムネーの図式もほぼ同じである。「民衆とは何か」の間に答えてラムネーが描く民衆像は、農民、鉾夫、職人、漁夫、兵士、芸術家、文学者、科学者の順である。「享樂にばかりふけている小数の特権階級を除けば、それが民衆である。すなわち

人類である。」(「民衆の書」二章)

ミシュレによれば、農民は苦しい生活の唯一のよりどころとして、民族意識、兵士の偉大な伝統、兵卒の名誉を持っていた。農民と職人の美德は、自己犠牲、義務感、そして何よりも愛国心である。だが、民衆のための祖国ではなく、祖国のための民衆という重大な倒錯があった。ブルジョアも役人も、そして牛や馬も(実際に博愛主義者ミシュレは、民衆にたいする愛とともに動物一般にたいする博愛も説いている)すべてフランスに存するものは祖国に属する。みんな尊い。かくて民衆にたいする愛は拡散し、民衆像はあいまいになる。

ミシュレが民衆に認めたもう一つの美德は単純さ(Simples)——物の本質を分析的ではなく直感的に一気に把握する能力)であった。彼は単純さを民衆の本能的な属性のうち最も優れたものとして、それを最も高度に備えた人物に天才(homme de génie)の名を与えている。その例としてはラフォンテーヌ、コルネーユ、ニュートン、ラグランジュ、アンペール、ジョフルワ・サンチレル等を思いつかべている。すなわち彼の考えた最も民衆的な人物は現実の民衆の中には存在せず、むしろミシュレが墮落しているという上流社会にいた。現実の民衆とあるべき民衆の間の矛盾は、民衆を描こうとしたロマンチックに共通した悩みであった。

フランス革命を経て、フランスといういくつかの古い共同体(commune)が、一つの祖国(Patrie)に成長したことは、ミシュレの大きな喜びであった。彼は祖国とは友情であると考えた。個人間の友情が高められた時、祖国が誕生する。

このようにすべてを心情にかんげんする人道主義が社会悪の原因をどのように見、いかに解決したか? ミシュレは社会的悲慘の原因について「相互の無理解と誤解」以上のものを指摘していない。

(この点では搾取や剰余価値らしきものを理解していたバルザックやラムネーは卓越していたのではないだろうか。ラムネーは「金持の排他的な利益のために、金持によって作られた法律によって、ほとんど金持だけが貧民の労働からもうけて、その労働が貧民にとつてます」割に合わないという事実」を指摘している。)⁽⁵⁾ ミシュレの解決策は結局、心情による説得、すなわち教育であった。

「政治の最も大切な部分は何か?、教育、次に大切なものは?、教育。三番目に大切なものは?、教育。」(「民衆」P. 378)

これが人道主義のゆきついたところであった。おそらくそれは一八三〇年以後のロマン主義の良き部分であった。あのロマン主義の首領とされるが、常に一步おくれることによって偉大になったユゴーは、第二帝政期になってようやくこの民衆をジャン・ヴァルジァンに結実させ、あるいは「民衆に」(Au peuple)と題して民衆に呼びかける。彼等は来るべき時代の主人公を予感していた。彼等が語りかけるべき対象、彼等が生み出し、依存し、代表すべき存在としての民衆を漠然としたかたちで信じていた。彼等は二月革命に手をかした。しかしいざ革命が起つてみると彼等の思想も文学も無力であった。六月事件が起つて、ブルジョワの憎悪のなかで数千の労働者が殺された時、彼等の人道主義の無力は明白に証明された。その後、この派の文学運動は崩壊の運命をたどる。

「祖国、わが祖国のみが世界を救うる。」(P.362)

この「民衆」の最後の頁の文章は四八年の事件と、その年に出されたマニフェストにてらして見る時、何と無力に響くことだろう。赤旗を拒否した、ラマルチーヌとカペニャックのみごとな敗北。ルイ・ナポレオンの微笑。

- (1) F. Dine; Lamennais, (Garnier Freres, 1952 P.129)
- (2) J. Michelet; Le Peuple (comptoir des imprimeurs—unis 2^e ed. P.36)
- (3) Stendhal; Mémoires sur Napoléon (le divan P.31)
- (4) ラムネーは排他的ナショナリズムを激しく攻撃してゐる。
Le Patriotisme exclusif, qui n'est que l'égoïsme des peuples, n'a pas de moins fatales conséquences que l'égoïsme individuel; il isole, il divise les habitants des pays divers, les excite à se nuire au lieu de s'aider; il est le père de ce monstre horrible et sanglant qu'on appelle la guerre. (Le livre du peuple, paroles d'un croyant, Garnier P.150)
- (5) J. P. メイヤール「フランスの政治思想」(岩波、五十嵐訳P.55 参照)

(三)

人道主義的な思想家や文学者の多くは、下層階級の人々に対する同情と共感をあらわに示していたが、それは決して上流ブルジョアジーに正面から対立するものとはならなかった。文学者達の民衆のイメージが漠としていたのも、民衆の定義が「小数の特権階級をのぞく国民のすべて」というようなほとんど無意味なものになったのも、彼等を支持する階級が現実には、七月王制下のブルジョアジーであつたことに関係がある。

たとへ人道主義者達が、下層階級や労働者に期待をよせていたとしても、一つの階級として彼等に好意的な文学運動を支持して発展させるほどには成長していなかった。そして労働者階級がブルジョアジーに対立し、戦闘的な階級として成長してきた時には、階級間の融和を説く人道主義的な理論は全く役に立たないどころか、むしろ有害なものであつた。それは工場の親方の説得に似ていたのである。

一方ブルジョアリーの側としても、民衆熱にかぶれた文学者が自由・平等・博愛を主張するのは、はじめのうちは彼等にとつても都合であつた。しかしブルジョアジーが支配を確立し、他方これに対立するものとして労働者階級が力を強めてくるにつれ、人道主義者の主張は彼等の利益に反する場合が多くなつた。せいぜい金持の夫人達に慈善行為をすすめるくらいならいいのだが、労働者を反抗にかりたててゐるようになっては困る。今さら「民衆の声」など聞かなくてもいいのだ。

善意の文学者達が自己の説教の快い調子に陶醉していた間に、事

態はこのように進み二月革命をむかえた。人道主義の矛盾は、いっ
きよにあらわれたのである。ラムネーやミシュレーは、基本的には
七月王制時代のブルジョワ・イデオログであったが、この時に至
つて彼等はもはやブルジョアジエをも代表していないことを知っ
た。もちろん労働者階級も彼等の思想を受入れはしない。このよう
にして民衆を主題とした文学、ラムネーとミシュレーの不幸な晩年
が導かれたのであった。

スタンダールが人道主義の運動に示した反応は、他の作家とは非
常にことなっていた。人道主義的な文学者の動行に深い関心を寄せ
ていたが、彼等の熱狂を全くよせつけなかった。同じ世代に属する
ラムネーに対しては、彼が左傾する以前、ジェズイットの有能な指
導者として活躍した一八二五年前後の活動に最も関心を示している
ようである。この時代スタンダールがイギリスの雑誌に寄稿した評
論にはラムネーにふれたものが多い。

例えば一八二五年二月二十日の「ストリッチへの手紙」ではラム
ネーの演聖法についての論文 *De la Loi du Sacrilege* を取りあげ
て次のように批評している。

「このジェズイットの党派の綱領はきわめて巧みにかかれてい
る。この著者はど才能と雄弁にめぐまれた作家は少ない。この点に
かんしては彼はフランスに名譽をもたらし⁽¹⁾た。」

同じ年の六月にスタンダールはニュー・マンスリー・マガジン誌
上で「フランス散文界の現状」と題して当時の文学的のスケッチを
試みている。ここでもやはりジェズイットの首領の一人としてラム
ネーの名をあげ、バンジャマン・コンスタンとラムネーの論争があ

つたことを記している。

さらに二十六年の三月にはラムネーとエクスタイン (Eckstein)
についてかなりの頁をさいて、彼等がいかに野蠻なカトリックを改
良して、上流社会、特に御婦人方の間にたくみに入りこんでいつた
かを述べている。

云うまでもなくジェズイットとは偽善の代名詞であり、スタンダ
ールの非常に嫌悪した宗派であった。スタンダールがジェズイット
に対して抱いていたイメージは、例えばジュリアンの残された幸福
な時間を乱しにやつてきた僧侶のごときものであった。このジェズ
イットは大通に面した獄舎の門の泥の中にすわりこんで、「わ
しは天の使命を帯びている。あのソレル青年の魂を救うのはわしの
義務なのです。みなさん拙僧の祈りに力をあわせて頂きたい。」と叫
んでいるのである。

スタンダールの判断では、この僧侶の意図は、ジュリアンを懺悔
させて、それで彼からいろいろな打明け話を聞いたようなふりをし
て、プザンソンの若い婦人仲間のあいだで顔を売ること、新聞に名
を出すことであつた。ところが僧侶をとりまいた群衆は、僧侶と共
に祈り、あゝいうありがたい人の助けをこつたのはよほど情の
強い人だと思つている。スタンダールはラムネーを戦うべき敵とし
て充分その才能を認めているのであるが、本質的にはこの僧侶とか
わりがないと思つていたのであろう。スタンダールは人道主義者たち
の運動にジェズイットの偽善を鋭く感じとつていた。ラムネーの
左傾は、スタンダールの目にはラムネーのブルジョワ化と映じた。
それは銀行家の支配する時代に対する巧みな順応ではなかったか。
だからラムネーが「一信者の言葉」を書いて教会を離れ、民衆に近

づいてきたとしても、心を許す理由とはならない。

スタンダールは一八三五年の友人にあてた手紙に、「緑の狩人」(Le chasseur vert) という小説でフランスの小都市のブルジョワの精神生活を描く計画であることを述べ、そこで小都市のブルジョワ達がラムネーについてどのように考えているのか質問している。この作品は今日「ルシアン・ルーヴェン」の名で知られている。「ルシアン・ルーヴェン」では一八三〇年代におけるラムネーの役割が次のような形で描かれている。

代議士となつてナンシーから出てきたデュ・ポワリエ氏はパリの桁はずれな豪華さに晒然として次のように考える。

「民衆は当分は代表されまい。代議士も選ぶことができないのだから、……おれはフランスのオーコネルカオルベツトにならう。なんだって手心はしない。独特の大きな地位を築くのだ。国民軍の将校たちがこぞって選挙人になる時は敵もできようが……まあそういう時は十年も先だ。なにかうまい終身の地位があつたら身売してやろう……」

結局デュ・ポワリエ氏はラムネーを思いつくのだ。スタンダールは続けている。

「二日とたぬうちにこの聖パウロの再来は宗旨変えを決心した。しかしどうして宗旨変えをするかは難しかった。かれは一週間以上そのことで想を練つた。大事なものは宗教を犠牲にしないということだった。しまいに彼は大衆から容易に理解されうる旗印を見付けた。その前の年、「一信者の言葉」が大変な人気だったので、これを自分の福音書と決め、ラムネー氏に紹介してもらい、感激おく能わざるかの如き態度を装つた。この柄の悪い弟子を見て名高いブ

ルタニエー人が自分の名声をかこつことになりはしなかったであろうか？、そこはわからぬがラムネー氏だって法王の讃美者から自由の愛好者になったのだ。自由というやつは、いささか軽はずみだが広い心を持つていて、よく人に向つて『どこの出ですか』ときくのを忘れる。」(57章)

神と自由、これがラムネー氏のモットーであつた。ここでスタンダールは自由という言葉が皮肉な調子で使っている。自由は大革命時代の輝かしさをすでに失つていた。リベラルに対するスタンダールの反感は、ウルトラに対する反感と同様、きわめて激しいものであつた。それは「パルムの僧院」における自由党の取扱いかたをみてもあきらかなことである。スタンダールは「一信者の言葉」を反乱の福音書とはみなかつた。サン・マルク・ジラルダンのようにロベスピエールやマラーを連想することもなかつた。スタンダールの所蔵した「一信者の言葉」には次のような書き込みが残されている。

読むに耐えない。聖書の模倣。(一八四一)

同じようにミシュレに対するスタンダールの評価も低い。もつともミシュレの主な作品が発表されたのはスタンダールの死後であるが、たとへこれらの作品をスタンダールが読んだとしても評価が変わると思われない。誇張された文体に対する嫌悪は、偽善に対する嫌悪と結びついている。「誰にも、民衆にさえも、へつらわぬことが大切だ」(「ローマ散策」一八二八年、十一月二十日)

ロマンティシズムの提唱者スタンダールの作品にはロマンティズムのしるしが刻みこまれているというのが一般の説である。もし、テオフィル・ゴーチエが書いているように、ロマンチック達に共通した特色が、ブルジョア社会に対する憎悪にあるとしたら、スタンダールこそまさしくロマン主義者であった。

だが注意しなければならないのは、「ブルジョワやブルジョワ性に対して反抗したロマンチック自身、骨の髄までブルジョワ精神によって養われていた」という事実である。これに対してスタンダールはブルジョワ精神によって養われることの最も少ない作家であった。

この事実はスタンダールのシャトーブリアン以下のロマンチックに対する反抗のしかたや、一八三〇年以後の、一般に当時きわめて革新的にみられていた人道主義的な文学運動の中にいちはやくブルジョワのおいをかぎつけて、きわめて否定的に扱ったスタンダールの態度からもおしはかることができる。スタンダールは孤立することによってブルジョワ化をまぬがれたのであった。

しかし孤立するといってもスタンダールはやはりロマン主義時代の文学者であった。彼は時代の影響から全くへだたつたところで仕事をすることはできなかった。したがってスタンダールの孤立とは、いかに時代の影響を独特なしかたでうけ入れたかということである。そこでやはり文学における民衆の問題になるのだが、この民衆をスタンダールはどのような形でうけとめたのか、スタンダールの民衆とブルジョワ的な民衆を結びつけるものは何か？、この間はスタンダールを解くうえでかなり本質的な間になりうるはずである。

私達はロマン主義時代に流行した、ロビン・フッド的人物について考えてみた。

- (1) Courier Anglais I. divan, (P. 140~141)
- (2) Courier Anglais II. divan (P. 349~367)
- (3) Ibid. (P. 456~491)
- (4) Correspondance IX. divan, (P. 291~296. AM. Allert Stapher)
- (5) Marginalia II (P. 164)
- (6) Théophile Gautier; Histoire du Romantisme.
- (7) プレハールノフ、論文集「二十年間」第三版の序文

(四)

- (1) 歴史に対する関心と民衆の登場

「近年（多分それは我が国の政治的変動の一つの結果であろう）芸術はかつてないほどに歴史のあとを刻みつけられた。我々はみな視線を我々の年代期にむける。大きな諸事件に向って進むうちに壯年に達した我々が、青春や青春時代の過失を理解するため、一瞬たち止まるかのように。（ヴィニィ「サン・マール」の序、「芸術における真理についての考察」より）。

一九世紀初頭、歴史に対する関心は、ヨーロッパ全土に広く深く滲透していった。スタンダールは一八二五年、今日のフランス文学

における最もブリアントな分野は歴史であろうと述べている。(1)大革命からナポレオン戦争に至る全ヨーロッパ的な規模をもった動乱の一つの結果であつた。兵士達にはもはや専制国家の傭兵ではなく、国民軍は祖国愛にもえた民衆からなつてゐた。全ヨーロッパの住民がはじめて意識的に歴史に参加した。

フランスと自己の青春をふりかへてみるヴィニの態度は歴史に関心を寄せた人々に共通したものであつた。たゞ彼等の青春を否定するか肯定するかによつて二つの党派に大きく分かれたのである。この時代の歴史は、民族意識とともに政治的な傾向を強めていた。歴史学者の多くは政治に直接コミットする意図をもつて歴史を書いた。きそつて大革命史を書き、実際に政治に参与した。政治的現実が歴史学者を要求してゐたのだ。

歴史小説が流行したのはこのような状況においてである。(2)スコットは全ヨーロッパを征服した。作家達の目は一せいに歴史に向けられた。そしていづれの陣営に属するにしろ、歴史をふりかへて彼等がさぐりあてたものは、結局、民衆というどうしても否定することのできない巨大な存在であつた。歴史がもはや歴代の王の事績の記録ではなく民衆の歴史であつたと同じく、文学の主題もまた民衆となつた。

(2) 二つの民衆像

ここ二十年來、フランスで最も成功した文学作品は何か。

ウォルタースコットの小説。

ウォルタースコットの小説とは何か。長い描写の入りまじつたロマンの悲劇。(スタンダール「ラシースとシェクスピア」)

スコットの歴史小説はフランスのベスト・セラーであつた。スタンダールもバルザックもロマン派の作家の大部分はスコットの愛読者であつた。影響も大きかつた。スコットはフランス文学に革命をひきおこしたとスタンダールは書いてゐる。(3)

スコットの小説、例えば「アイバンホー」では奴隸のガースやワインバ、サクソンの郷士セドリックが、リチャード獅子心王や騎士アイバンホーをしのぐ生彩をはなつ。無名の大衆はスコットにおいて小説の主人公の地位にさえのしあがつた。「ミドロジアン」の主人公は一小作人の娘である。死刑台前の素晴らしい群衆場面、町や村の民衆の生々した生活描写。

スコットを意識しながら歴史小説を書きはじめてバルザックには、同じように「民衆によつて王を造形し、民衆の精神が最も刻印されている若干の人物によつて民衆を造形する」意図があつた。(4)歴史小説からリアリズム小説へというのがメグロン⁽⁴⁾のシエーマであるが、バルザックは歴史小説から出発して、結局は、ばう大な民衆をマスで捉える一方、ブルジョアジーの日常生活に秘められたドラマを描くに至る。

この無名の大衆、あるがまゝの民衆に対して、あるべき民衆が存在した。それは散文的な現実世界からきりはなされて、ロマネスクな性格をもち、一見して現実の民衆とその日常性からは無縁にみえるが、実は民衆の本質的な部分をさぐりあてていたのであつた。この時代、あるべき民衆の一つの型としてロビン・フッドの人物が登

場する。スタンダールのロビン・フッド的人物、フェランテ・パラを論じる前に、子供用の物語としてあまりにも有名になりすぎた結果、誰も真面目には考えようとしないうこの伝説上の人物について少し述べてみたい。

(3) ロビン・フッド伝説

ロビン・フッドは、英国の古いバラードにうたわれている伝説上の人物。シャーウッドの森に住んで富める者から財宝を奪い、弱い者貧しい人を保護するロビンとその仲間物語は民衆のあいだに大変な人気があった。後に禁止されるが、十六世紀頃まで、ロビン・フッドの祭があった。村人は繰出で歌ったり踊ったりしてその日を祝ったという。伝説中のロビンはサクソンの末裔、活躍したのは十二世紀、リチャード獅子心王と同時代とされている。

ノルマン人によるイギリス征服はその一世紀前、十一世紀にはじまる。一〇六六年、ヘイスティングでノルマンジー公ウィリアムがハーロルド二世を破つてから、サクソン人による抵抗は次々と鎮圧され、彼等の土地は没収された後、ノルマン人の間で分割された。隷属を拒む者には、海外亡命か、ノルマン人の手のとどかない森や山に入るしかない。

隷属よりは自由を選んで森に入った人々によって多くの集団が組織された。彼等は山賊としてノルマン人の金持をなやませた。とりわけケンブリッジ地方にあった避難民の皆は地勢の利と首領ヘレワードの知略によって、ノルマンを苦しめサクソンに希望を与えた。この組織はヘレワードの死と共に破壊されたが、この伝統は数世紀

にわたってイギリス各地に残り、多くの山賊の名が民衆のあいだに記憶された。

「それ以来、英語でアウト・ローという言葉（法律の保護の外におかれた者、追いはぎ、山賊）は、被征服民族の口にはばるとき古い意味を失った。それどころか英国の古い物語、伝説、民謡は、おたずね者と彼等が森の樹の下でおくる放浪を自由な生活のうえに、一種の詩的な色調を与えているのである。」（ティエリ「ノルマン人によるイギリス征服史」より）

ロビン・フッドはこのような歴史的な事件を背景にして生れた民衆の英雄像なのである。彼等はうたっている。

Robyn was a prude outlaw,
whyles he walked on ground;^(c)

(4) ロビン・フッドの性格

(a) 専制権力に対する反抗

ロビンは郷士の出身である。郷士は小作農、小地主の階級で、ノルマンに反抗するサクソン民族の指導者はこの階級に多かった。貴族や権力者はノルマン人によって占められ、サクソンの民衆はその圧制に苦しんでいた。民族の対立はここでは階級の対立であった。民衆を愛すること、民族や国を愛することは、はじめロビン・フッドの物語においては、一つのことであった。しかし十二世紀の物語として語られたロビン・フッド伝説では、民族的な対立意識の

弱まりを反映して、ノルマンとサクソンの対立は、むしろ金持や悪しき権力者と貧しい人々との対立におきかえられていく。

ロビンの敵は、ジョン王とその部下である郡長や森役人であり、権力と富をほしいままにしている僧院長、大僧正といった高位の僧侶、あるいは小麦を買占める大商人である。ロビンの仲間には森に住んで、王の鹿を密猟したり、森を通りかかる金持から彼等が民衆からしぼり取ったであろう金銀を奪う。郡長とその部下がロビンの一味を捕えるためにくりかえす滑稽な失敗、ロビンの仲間の勇気と智慧はバラッドのあきない題材である。

反対に、小作人、小売商人、子供をかえた寡婦といった貧しく弱い人々は、常にロビンの保護をうける。おたずね者と村人のあいだには深い信頼の感情があった。森の外には悪徳が、富める権力者の法律が支配していた。森とアウト・ローの存在自体が民衆にとっては希望のしるしであった。

(b) 民衆のユートピア

バラッドはこれらアウト・ロー達を「楽しき人々」と呼ぶ。緑の森は陽光に満ち、小鳥がうたい小川が輝くユートピアである。そこには民衆が望んでいた自由と平等と自治が誇り高く存在している。

緑の服を着た森の住民達は丈高く肩巾も広い。彼等の快活さ、力と智慧。彼等はそれぞれ一芸に秀で、弓や棒の名人であり、美しい歌をうたう吟遊詩人である。勇気、献身、敬虔、寛大さ……彼等には民衆の考える最上の徳が与えられている。

(5) ロビン・フッドとロマン主義文学

スコットはロビン・フッドを一つの典型とみているようである。スコットは十八世紀スコットランドで民衆に人気のある盗賊の首領、ロブ・ロイを主人公として小説を書いた時（一八一八年）ロビン・フッドとロブ・ロイとの共通性を指摘して、特にその民族的性格に注目している。

「アイヴァンホー」（一八二〇年）では、民謡の中の逸話を巧みに組合わせて、ロビン・フッドとシャーウッドの森を登場させた。

ロビンは、ここではノルマンとサクソンの争いにおいて、サクソン人セドリックに味方して戦っている。

民族の対立というスコットの小説のテーマの一つに異常な関心を示して、それを発展させることによって、自己の歴史観を確立した歴史家がフランスに現われた。スコットを愛読したオーギュスタン・チエリである。彼は歴史の発展の法則を侵略民族と被侵略民族の社会的対立のなかに認めようとした。「ノルマン人によるイギリス征服史」（一八二五）⁽⁶⁾は、この意図から書かれている。チエリは征服は勝利者の戴冠によつて終るとは考えなかったから、被征服者の長い抵抗を追つていく。このような理由からチエリがこの作品の中でロビン・フッド伝説に与えた重要性が理解できよう。彼はロビン・フッド伝説に、ナショナリズムの側面と、圧制に苦しむ民衆が生み出した民衆の理想像という特色を指摘した。

一般にチエリはミシュレの先駆者と云われているが、どちらと云えばミシュレが高く評価されている。これに對しスタンダールはチエリを高く評価し、「ノルマン人によるイギリス征服史」が出るとすぐ、「独立不羈の精神」（*l'homme d'esprit indépendant*）と

か、「最も良心的な哲学」(2)とかいう言葉を使つて紹介している。おそらくサンシモン主義者としてのチェリに対する共感もあったであらう。チェリは一時サンシモンの秘書であつた。

この作品は文体の面からもロマン主義時代の傑作とされている。二つの特色、ピトレスクとドラマチックはそのままスコットの特徴ともされている。スコットの影響をうけたのはバルザック、スタンダール、ユゴーといった小説家だけではなかつた。

しかしスコットの影響は強かつたが、スコットのロビン・フッドが特に注意をひいたという例は、チェリを別とすれば、ほとんどないといふてよいのではないだろうか。フランスにはロビン・フッド的伝説はないようである。もしロビン・フッド的人物が描かれるとすればこの程度の条件が揃つていた。あるいはこの程度しか条件は揃つていなかった。

スタンダールが「アイバンホー」を読んだことは、彼がこの作品の感想を記していることから明らかである。しかし私達はスタンダールがスコットを読んでロビン・フッド的人物を描こうと決心したと主張しているのではない。それは実証できない。ここではスタンダールがその中に生きていた文学的環境を問題にしているのだ。このような条件の下にあつたスタンダールが中世イタリアの山賊の物語を読んだ時に、それをロビン・フッド的に捉えるのはきわめて自然であつたとは云えよう。スタンダールはスコットに書き送つてゐる。「作者(スコット)がああのはらしいイタリアの中世をえがく気になれなかつたのは実に残念です。人間の魂の自由への第一歩をそこに見出されたでしょう。」(1821.2.18)

そしてスタンダールは優れたロビン・フッド的人物を創造した。

フェランテ・パラが副人物であつたといふことは、かえつてそれが民衆像の形成過程における最も尖端の部分であることを示していることにならないだろうか。

ロマン主義時代の文学に現れた人間像を考える場合、一つの典型としてロビン・フッドを考えることは有効だと思う。ロマン主義文学に続々と現れた盗賊達は、ロビン・フッドのかなり歪められた形であらう。シラーの「群盗」——ロマン主義時代フランスで最も好んで上演された戯曲であつた。フランスロマン主義は外国文学の圧倒的な影響下にあつた。フランスの国際的な地位の低下と結びつけて考えるべきであらう——の主人公モオルは盗賊志望の青年コジンスキーにむかつて次のように説教する。

「きさまの家庭教師は、ロビン・フッドの物語でもそつときさまの手へ渡したんだろう——そんな不屈なやつは囚人船にでもつないじまえ——おかげできさまは子供っぽい熱にうかされて大人物になるなどと莫迦げた欲を起したんだろう?」

- (1) *Courier Anglais* II *Divan* (P.365)
- (2) 例えは Vigny; *Cinq-Mars*; Balzac; *Les Chouans*; Merilucカーチ「歴史文学論」参照
- (3) *mée*; Charles K. Hugo; *Notre Dame de Paris*.
(*Courier Anglais*; V. P114~115) メグロンによれば一八二〇年から一八三〇年にかけての十年間で、スコットの小説はフランスだけで約一五〇万売れた。
- (4) Balzac; *Avertissement du Cars*
- (5) Gummere; *Old English Ballads* P.1.

(6) A. Thierry ; Histoire de la Conquête de l'Angleterre par les Normands

(7) Courier Anglais. I. Divan. P.364

(8) 例えばバイロン「海賊」(一八一四)のコンラッド、プーシ

キン「ドゥブロフスキー」(一八三二)「キルジャリー」

(一八三四)「大尉の娘」(一八三六)のブガーチョーフ。

メリメ「コロンバ」(一八〇四)の山賊達 etc.

(9) シラー「群盗」(久保栄訳・岩波文庫・一二五頁)

※ロビン・フッドを主人公にした戯曲、テニソンの「森の人々」(The Foresters)を忘れていると云われるかもしれない。時代がかなり下る、しかもこのロビン・フッドはあまりロビン・フッド的でないのだ。テニソンはロビン・フッドの物語にあらたに妖精と恋愛をつけ加えた。さらに桂冠詩人にふさわしくリチャード王に対する忠誠を強調した。かくて民衆の伝説は洗練された。

同じ頃に出ているH、パイル「ロビンフッドの愉快な冒険」(岩波少年文庫)はこれに比らべると、だいぶバラードに忠実である。

※※もちろん、ロビン・フッド伝説は封建時代の特徴をもつていた。例えば次の二点。(1)リチャード王に対する忠誠——冒險好きな王とロビン・フッドやタックの出会いは、この物語の重要な部分である。リチャード王の人氣には彼のロマネスクな性格と彼の不運があずかっている。民衆は彼が民衆を圧迫する権力とは無関係であるかのように錯覚している。(2)騎士道精神——処女マリアに対する信仰。これは騎士道文学の影響である。しかしこれ等は十九世紀の作

家がとりあがる場合にロビン・フッドの本質的な部分にはならぬと思う。

(五)

「パルムの僧院」は出版の翌年にはバルザックの素晴らしい讃辭をうけたのだから、幸福な作品であつたともいえる。バルザックの批評は、それが対象とした作品とともに、その背後の民衆と歴史とロビン・フッド的人物を問題にした時代的風潮をまざまざと感じさせる。二人の作家がこの時代の中心的な課題に共通の地盤をもつていたことが、バルザックがスタンダールの内部に深く迫りえた根本的な理由であらう。

スタンダールを論ずるほどの人なら、このバルザックの優れた批評にいくらかの頁をさくことを忘れないが、いづれも申合せたように、文体と構成についてバルザックが加えた批評を分析することによって、スタンダールとバルザックの創作方法のちがいを追求しようとする意図で書かれているから、何故バルザックがあれほどフェランテ・パラに執着しているかは解いていない。バルザックがあれほどの烈しい共感を示している以上、本質的に共通した部分があつたと考えて、まず共通した部分を探り次にちがいを考えるのが、単純素朴ではあるが最も自然な有効な方法であらう。

バルザックの批評で最も目立つのは、彼がフェランテ・パラに示す特別に強い関心とパラに与えた高い評価である。バルザック以後これほどパラに力点をかけた「パルムの僧院」論を私達は知らない。

「彼（パラ）の行為、言葉はすべて崇高である。彼は信者の確信、偉大、情熱をもつ。大公、大臣、公爵夫人がその仕上げ、把握、現実性においていかに高められていようとも、フェランテ・パラ、この画面の片隅に棄てられた見事な立像は諸君の目を捕え讃歌を強（こ）る。」（P.51）

バルザックの賞讃は主として次の三つの部分に向けられている。

1 共和主義的徳性の崇高さ。

祖国と民衆に対する素朴で強い愛情。イデオロギーに対する確信。勇気と決断。行動力。利己心の欠如と自己犠牲 etc.

2 イタリア的性格とエネルギー。

「イタリアの精神家族の典型」（P.51）

「スコットランドの清教徒」（Scott; The Uid Mortality）を除き、ベール氏がパラ・フェランテに与えたときエネルギーを持った人物を書いた本はない。」（P.53）

「熱にうかされた熱い血、敏感な行動、機知の迅速」（P.74）

3 ロマネスク

「急進主義者の上流夫人に対する恋という深刻な矛盾」（P.52）

「バルフォア・オブ・バーレーとパラ・フェランテとを選ぶ。なるほどデッサンは同じだ。がウォルター・スコットは如何に偉大なる色彩家であろうとも、ベール氏が彼の人物に投げかけた如き、テイ

チアンの強烈華麗な色を持たなかった。パラ・フェランテは全身これ詩、バイロン卿の『海賊』にも勝る詩である。」（P.53）

バルザックの批評が優れているのは、彼がスタンダールをがむしやらに自己の立場にひきづりこんで理解したからである。そしてこのような批評の方法が優れた結果を生み出すには、スタンダールとバルザックがよほど根深い所で結びついていなければならないはずだ。

「私自身が同様な人物を育んだことがあるだけになお一層、このフェランテ・パラの創造に感激するわけだ。」（P.53）

同様な人物とは、ミッシェル・クレチアンである。「幻滅」のセナクルの一員。ヨーロッパ連邦を夢みる共和主義者であつて、靈魂不滅説をも信じている。（ラムネー的矛盾を含んだ共和主義）サン・シモン派。セナクルの他の青年達と同じく、ラテン区で清貧の生活を送る知的ボヘミアン。ベランジェの歌を口ずさみ、長いひげをはやしている。

「急進主義者の上流婦人に対する恋の矛盾」というテーマは「カジニアン公妃の秘密」に描かれている。ミッシェル・クレチアンは社交界の遊蕩な夫人、モフリニューズ公爵夫人を恋した。この、部屋にシャルル十世の肖像を飾っている公爵夫人の夫も勿論王党派であつて、七月革命にはチェイリリ宮を守つて闘つたのであつた。一八三二年、七月王制に反対して正統王朝派と共和派二つの側から反乱が起つた。ベリ公妃がボルドー公を擁して立つ。モフリニューズ公爵夫人はパリからベリ公妃に情報を送つていた。正統王朝派の反

乱が失敗におわたつた六月、ユゴーの小説によつても有名な、サン、メリノ事件が起つている。共和主義者に味方して叛徒の側に立つたミッシェル・クレチアン、バルザックによればこの「高貴なる平民」(noble nèbén) は一商人の銃弾に倒れる。二年間、劇場や街路を公爵夫人の後をつけてさまよい歩いたミッシェル・クレチアンは一言の言葉もかけることなく、結局夫人にあてた一本の手紙を残しただけだった。

バルザックとスタンダールは相対立するイデオロギーと階級の二点で矛盾を捉えているが、単に階級の夫人と下層に属する青年の恋愛は、ロマン主義時代に流行したテーマであった。民衆の抬頭とかみあわせて考えると興味深い。上流階級だけを舞台とする小説は存在の基礎を失いはじめていたが、下層階級だけを描いて小説を構成するだけの条件はなかった。偉大な文化の爛熟期、生成と崩壊の過程がとりわけ鮮明に現われている時代である。この階級の問題は当然のことながら多くの場合、イデオロギーの対立と結びついていた。

バルザックはフェランテ・パラがミッシェル・クレチアンより魅力的であり得た理由としてイタリアとフランスのちがいをあげているがこれも正しい指摘であった。その正しさは、イタリアの気候風土、イタリア人の性格と共に一八三〇年代におけるイタリアの政治状況を考えあわす時いつそう納得がいく。

共和主義的徳性に対するバルザックの共感を考える場合は、彼がすでにそのような徳性を備えた人物を描いていたことを考えあわせの必要がある。「ふくろう党」に描かれた「青」の指揮官ユロとその部下は同じく崇高ではなかったか。その後もバルザックは大革命

とナポレオン戦役の勇士の生きのこりを高潔な共和主義者の副人物として数多く描いている。バルザックの共和主義的傾向はベルニー夫人に接触する以前の青年時代はかなり強烈なものであったといわれている⁽²⁾。後に改宗するとしてもこの部分が完全に消えたのではなく、バルザックの矛盾のよき部分として残っていたのだった。「パルムの僧院」批評がまさざとそれを感じさせる。

(1) Falzac; Etudes sur M. Bayle (Les trésors de la littérature française)

(2) 「バルザックはその頃までナポレオンを崇拜する青年らしく、一七九三年の平等を夢のように回想する共和主義的イデオロギーをもっていた。」杉山英樹「バルザックの世界」(中央公論社P.1012~102)

(六)

バルザックは「パルムの僧院」を、主として政治を描き、政治的な主張を前面におしだした小説という意味で、政治小説と規定した。

「要するにスタンダールは現代の君主論を書いた。」(P.17)

自称王党派のバルザックにしてみれば、政治小説と規定した以上次のような逃げをうたねばならなかった。

「ベール氏はせんせん説教者でない。彼は殺逆を鼓吹するわけではない。たゞ諸君にあるがまゝの事実を提供するだけなのだ」(P.57)

「彼は一種の自由主義的意見をもって初登場した。しかし私はこの偉大な打算家が両院政府の愚行にいつまでも惑わされていたとは思えない。「パルムの僧院」は深い意味を藏しているが、それは確かに君主政体に対峙するものではない。彼は愛するものを嘲笑する。」
(P. 76)

苦しい弁解はむしろバルザックの理解の深さを示している。彼は知りすぎていたはずだ。正義がエルネストの側にあったか、フェランテ・パラの側にあったか、小説家の説教がどのようなものであるかを。あるがまゝの事実の提供——フェランテ・パラの行為——によつて説教するのが小説家バルザックの手法ではなかったか。

フアブリスの脱獄、大公の暗殺、反乱。フェランテ・パラは政治的な事件の頂点でさつそうと登場し、小説の最も重要な部分を支配している。

この狂人の出現が少しの唐突さも感じさせないのは、スタンダールが細心に伏線を張つて、彼の出現を予告しておいたからである。ジーナとサンセベリーナ公爵の奇妙な結婚を提案するモスカは次のように語っている。

「あなたが救つておやりにならないとあの男が死にかねぬ大失敗、それはフェランテ・パラという男にナポレオン金貨を二十五枚貸してやったことなんで。これはこの国の狂人みたいな男だがちよつと天才みたいなところもある。われわれはこの男に幸い欠席裁判で死刑の宣告をしました。このフェランテは生涯に二百行ばかりの詩を書いた。これが無類のもので、まったく読んでさしあげてもい

いんだが、ダンテに劣らぬ美しいものですよ。」(六章)

次にはジーナがふとしたことから減刑書を得てやった囚人の話から何気なく語られている。

「運わるくこの男は感心しない弱気な人間だった。あのフェランテ・パラが死刑にされたのはこの男が自白したからだ。」(六章)

そしていよいよフアブリスに脱獄を勧める手紙の中で、サンセベリーナ夫人と親しい、三度も破獄の経験がある追いはぎの男として、匿名で示される。これだけの準備があつてはじめてフェランテは舞台上に登場する。第二十一章、脱出と復讐の章である。

フェランテ・パラが公爵夫人に接近するのは彼女が不幸をなげくようになった頃より一年も前のことであつた。第一印象は次のように記されている。

「まだ若く、大へん美男だが、おそろしく服装はきたない。着物は方々一尺も裂けている。が眼はいかにも熱烈な心を思わすように火を放つていた。(……)」

彼はひどくやせていることはよく見てとつたが、その眼があまりに美しく、いかにもやさしい熱情にみちていたので罪を犯した人間という気はまるでしなかつた。(……)」

フェランテ・パラは恋する人として必要なだけのことを語る。公爵夫人はこの出会のことを一言もモスカに云わなかつた。はじめての秘密がある。夫人がサッカの森を散歩する時をみはかつて、隼

のような早さで駆けよってくるフェランテ。彼の恋はますます熾烈となる。

ファブリスが捕えられた。

『護民官たる者が事情を調査しなければならない不正な事件がまた一つ起りました。一方たゞの一人私として行動するにしても、私はサンセヴェリーナ公爵夫人にこの一命をささげるほかありません。それをここに持参しました。』

この狂人で盗賊の男の真心からの献身は夫人を強く動かした。彼女はフェランテを相手として話しひどく泣いた。(これこそあたしの心をわかってくれる人間だ。)

ファブリスの身に危険がせまった。パラは再び勇気ある男の命と鉄の体をささげに来る。二日後、町中が処刑の噂でさわいでいた。公爵夫人はすっかり涙に泣きぬれて口もきけない有様であった。彼女はついに命令する。

「……あたしの心を苦しめる男を刺し殺すのです。ぜひ毒殺してはしいのです。……」

忠実に正確に、そして慎重に御命令のとおりやりとげましょう。私は自分の復讐が奥様の復讐と一つに合体するだろうと予想しています。……

ファブリスの殺害者を毒殺するのです。

私はそのことを見ぬいていました。ここ二年あまりこんなみじめな放浪生活をつづけつつ私は自分自身のために度々そのようなことを考えていたのです。………」

復讐の計画は完了した。サンセヴェリーナ邸の貯水池の堤が切れる時、大公は暗殺される。フェランテはあわただしく一礼すると出ていく。公爵夫人は呼びもどす。「フェランテ、崇高な人(homme sublime)」

彼女は無理やりに宝石箱を受けとらす。フェランテはそれをポケットにしまい部屋を出た。夫人はまた呼びとめた。彼は心配そうな様子でもどつてきた。夫人はサロンの中央に立っていた。彼女はパラの腕の中にとびこんだ。一瞬後、フェランテはほとんど幸福のために気絶した。夫人はその抱擁からすりぬけて眼で入口の方を示した。

「あれはわたしの気持をわかってくれた唯一の人間だ。」と彼女は思った。(ファブリスだってあたしの云うことを聞いてくれたら、ちやうどあゝいうふうにしただろう……)

これをもシテロリズムと云うなら「パルムの僧院」はテロリズム讚美の文学である。これはスタンダールの最も尖鋭な部分なのだ。この点、優れた批評家は正当に指摘している。

「人は王に復讐することができる。」(バルザック)

「私はサンセベリーナ夫人の行為に何ら非難すべき点を見出さない。(…)それにパルムの大公が私にとってなんだらう。暴君にたいてして公正な判断(Justice)などない。」(アラン)

エルネスト四世はフェランテに死刑を宣告した。エルネスト四世はサンセベリーナ夫人を裏切り最愛のものを奪った。暴君を裁く裁判がない以上、我々は暴君に対して何をしてもいいわけだ。エルネスト四世の暗殺を非難する理由は全くないということになる。これは激しい言葉だ。誰を暴君とみるか、そこから私達の思想がはじまる。

絶対権力に対する反抗がこの作品の主要なテーマであることは疑いようがない。それがこの小説の最も劇的な部分に、大公に対する復讐という激しい形であらわれている。個人的な復讐であると同時に、公的な政治的な復讐は不当な理由によって劣等と従属の地位におかれた者が、平等と自己の権威を回復する正当な手段である。

「この時以来、公爵夫人の性格に一種の快活さがまた現われた。重大な決意をする前は、何か新しいことが目の前にあらわれるたびに、大公に対して自分が劣っていること、弱いこと、だまされていること、を彼女は感じたのだ。大公は自分を卑怯にもあざむいたというのだ。そしてモスカ伯は本意ならずとはいえ、その廷臣根性から大公を援助したのである。復讐の決意ができると、彼女は自分の力を感じ、精神の一步一步に幸福を味わった。」

スタンダールは「ミナ・ド・ヴァンゲル」に書いている。「復讐とは行動することである。行動するとは希望をもつことである。」と。復讐のテーマもパラの出現と同様に突然にあらわれたのではない。スタンダールは暗示をくりかえすことによって、暗殺に至る読者の思想を鍛えている。ファブリスに脱獄の計画を知らせるシーナの手紙はロドウィコとモスカを次のような言葉で暗示している。

「一人はフェラーであなたを密告しようとした外科医を刺し殺すと脅かした人間。も一人はあなたベルジラーテからの帰りがけ森の中で歌をうたいながら立派な馬をひいてやってきた従僕をピストルで射殺した方が厳密には慎重だったといった人。」

スタンダールは、すでに暗殺を決意したサンセベリーナ夫人の内面を、このような人物の特色の捉えかたのうちに巧みに暗示しているのだ。彼女はあのマキアベリの教訓を心の奥底でかみしめていたにちがいない。「自分に危害を加え、またそのおそれある者を除いてしまふこと。」「やむをえざる時の戦いは正しく、武器がいかに希望を断たれる時は、武器もまた神聖である。」

同時にスタンダールは読者がふたたびあの二つのエピソードの意味を考えることを要求している。特に馬をひいた従僕の話は、読者もファブリスと共に悩んだ問題ではなかったか。モスカは云うのだ。

「あの従僕はあなたの命を手中に握っていたのだから、あなたはあの男の命をとる権利があった。」(十章)

さらに加えるならクレリアの素晴らしい言葉がある。クレリアはこ

の言葉を発することによっていっそう美しくなる。「あのかたはすっかり絶望しきっておられるという噂だ。……あたしだって、あの女傑のシャルロット・コルデーのように大公を刺殺しに行く！」（十八章）

シャルロット・コルデーの事件をきいてから、王侯達の暗殺者の表作りに熱中した幼年時代のスタンダールを思い出すべきであらう。

ファブリスの脱獄の計画はすゝみ、その日がせまった。ファブリスの生命に何かと危険が伴うので、公爵夫人はそばにフェランテがいないと、もう一刻も心がおちつかなかった。この男の勇気が彼女の心まで感染してくるのだ。

脱出の決行。すべてを操っているのは、二人の民衆詩人、フェランテ・パラとロドヴィコである。ファブリスを愛する二人の女が嫉妬の火花を散しつつ協力する。

十二時半がうって間もなく、合図の小さなランプが鳥部屋の窓にあらわれた。ファブリスは行動にとりかかる。霧の中のファブリスの苦闘。公爵夫人の衣裳の香りで我にかえったファブリス。ポー川に向う馬車。大逆罪のよろこびに酔うモスカ。……そして毒殺が決行される。

「サッカの者たちには酒を、パルムの奴らには水を、
パルムの連中には水を！」

裸の壁をじつと見つめている公爵夫人の凄惨な目。エルネスト四

世の死。フェランテ・パラの革命。パラは民衆のたぐ中にいて、いつものように勇敢に戦った。もう少しで勝つところであった。鎮圧したのはモスカの勢力である。フェランテ・パラはサンセベリーナ夫人に最後の手紙を書いた。

「護民官は、毎日、百フランをとり、それ以上はとらなかった。その残額をもってエゴイスムによって凍結していた魂どもに聖火を点じて蘇生させようとした。狐はわが足跡を追っている。それゆえに私は愛する人に今一度さいごに会うこともしなかった。あの人は共和制を好まない。優雅さと美貌ですぐれているのみならず、その才智においても私にすぐれた婦人だが、もつとも共和主義者なしでどうして共和国をつくるのか？ 私には誤っていたのか？……」

絶対権力に対する反抗と復讐のドラマは、公爵夫人と狂人の共和主義者が、思想と感情の一致した時点で行われた。この時シーナは最も充実して美しい。その後いくらか生きながらえるにしろ、彼女の生は復讐の完成と共に終わったと云ってよい。「生を感じるためには、情熱をもつて愛するか、あるいは憎む必要のある熱烈な心の人」、スタンダールのイタリア女であった。復讐がとげられ、革命が失敗した以上、フェランテ・パラとサンセベリーナ夫人を結びつけていた強いきずなは絶たれた。崇高な物語は終る。

- (1) Balzac : Etudes sur M. Beyle.
- (2) Alain : Stendhal (Universitaires de France, P.18)
- (3) マキアベリ「君主論」黒田訳（岩波文庫、P.51、P161）

- (4) Stendhal : Vie d'Henry Brulard, chap. 20.
(5) Stendhal : Mémoires sur Napoléon, divan, P. 35.

(七)

フェランテ・パラがスタンダールの創造した理想的人間像の一つであることは、スタンダールの美学の面からも云えよう。

「もし理想美を再び構成せねばならないとすれば、人は次のごとき長所を選ばらう。

- (1) 非常に活発なエスプリ。
- (2) 顔立ちには多くの優美さ。
- (3) 情熱の暗い焰ではなく才智の閃きに輝く眼。魂の動きの最も激しい表現は眼にある。それは彫刻にあらわせない。近代の目はそれ故すこぶる大きいはずだ。
- (4) 多くの快活さ。
- (5) 豊富な感受性。
- (6) 丈高いすらりとした身体、とりわけ青春の軽捷な風貌。」(イタリア絵画史、百十九章、現代の理想)

サンセベリーナ夫人がフェランテ・パラに認めたのはこの六つの特色ではなかったか。はじめての出会いでパラが夫人に与えた印象を思い出していたきたい。スタンダールの創造した人物の多くはこの条件に従って書かれているが、そのうちでもファブリスとフェラ

ンテ・パラはとくにスタンダールの理想美に近い。

ジーナはファブリスに脱獄を勧める手紙の中でパラのことを次のように表現している。

「……まれに見る実行力のある人間で、あなたと同じくらい勇氣がある。……」

……この男はあなたのように、すばしくつて機敏なので……」

くりかえされる「あなたのように」という言葉は彼女が無意識ではあるが、フェランテのうちにファブリスを求めていることを暗示している。この生活も思想も年令も非常に異った二人の男は、理想美の条件からみると意外によく似ている。フェランテとサンセベリーナ公爵夫人の接近はそうした微妙な心理も含んでいた。だからファブリスが夫人の手に返される時、パラはすでに夫人にとって必要な存在ではない。フェランテ・パラとファブリスの類似は強調されねばならない。

男性的な性格のうちで、夫人が最も尊重するのは勇氣である。

「あたしはあの人(ファブリス)の自分自身では気がついていないといえるほどの単純な、完全な勇氣が好きなんです。」(十六章)

この告白ゆえに先に引用した夫人の「あなたと同じくらい勇氣がある」という言葉は一層の重みをもつ。パラは、ファブリスと自分のことを、ともに *homme de cœur* と呼んでいることに注意しよう。

勇氣はスタンダールの美学の中心的な課題でもあった。古代の理

想美の核心に力を認めたスタンダールは、力に代る近代の特質として勇氣を考えていた。ここにもスタンダール美学の美の相對主義があらわれている。「美とは幸福の約束である」というのがスタンダールの美学の基本的な命題であるが、フェランテ・パラが美しい人間像として映じたとすれば、彼が幸福を約束していたからである。勇氣は幸福の条件である。

「我々の風習では、ごく普通な程度の力を伴ったエスプリが力なのである。しかし我々の力は我々の武器の性質のおかげで、もはや肉体的な特質ではなく勇氣なのである。(……)

一七六三年における偉大な力はボーマルシェのエスプリではなかったか。」(イタリア絵画史百二十章)

「勇氣はその欠如が恥辱として罰せられるのではなく、死をもつて罰せられる場合において力の同意語である。それ故ヨーロッパにおけるかの最も有名な魂の所有者のごとく、勇氣とは正しく見ることである。」(同・七四章)

このようにして構成された美学は当然、急進的なものとなる。フェランテ・パラとファブリスの勇氣とはこのようなものである。

「私は誤っていたのか？」という問を残してフェランテ・パラは去って行った。ここにスタンダールの破目が大きく口を開いている。それはバルザックの云う「急進主義者と貴族の婦人との恋」の矛盾ではあるが、バルザックにあつては単に小説の面白いテーマであるにすぎないのに対し、スタンダールにとっては自己の内面の矛盾のあらわれであるだけに一層深刻な問題であつた。民衆を愛し、

民衆の名においてその幸福を追求し、民衆の幸福のためにはいかなることも辞さないといいつつも、民衆と共に生活することは苦痛であると告白する(そこが人道主義者たちとちがうところだ)スタンダールの矛盾が、小説ではこのような形をとった。

スタンダールにおける民衆と貴族の問題は、彼が理想美の見地からも、性格の面からも、はなはだしく似かよつておりながらも、思想と行動においては非常にことなつた二つの理想的な人間像を一つの小説に登場させたことと関係がある。あえて云うなら、スタンダールは矛盾を統一できないまゝに、自己の貴族的な部分をファブリスに、自己の民衆的な部分をフェランテ・パラにおいて表現した。従つてパラは一副人物にすぎないが、パラを問題にすることはスタンダールの最も尖鋭な部分を問題にすることになる。

フェランテ・パラとファブリスの行為は、スタンダールの内面における対話のごときものである。物語は自己疎外からの回復という形式をとつてゐる。マーチン・ターネルや、アーヴィング・ホーはファブリスは心理的な疎外におちいついてゐるという⁽¹⁾。なぜ社会的でなくて心理的でなければならないのか聞きたいところだ。ファブリスが牢舎に入らたがるのは疎外のこの上ない表現であらう。ひところエゴチスムにひつかけて、牢獄におけるファブリスやジュリアンの幸福を云々する議論が流行したが、不愉快な発想だ。ファブリスが一人のこのこと牢舎に出かけて捕われるのは、馬鹿氣たおろかな行為で、まさに悪しき社会が強制するマゾヒズムである。

「パルムの僧院」に描かれてゐるのは神聖同盟下の暗い世界である。ファブリスは常に追われている。スピールベルク牢舎の黒い影がある限り、彼は常におびえていなければならない。物語の幸福な

調子はいつもこの暗い影にかき消されていく。

スタンダールは「アルマンス」以来、すぐれた資質をもちながら人間がいかに社会的な圧力によって歪められていくか、あるいは悪しき社会によって歪められながらも、いかに人間が優れた性質を保持しうるかを描いてきたが、フェランテ・パラの場合はすでに死刑の宣告をうけ、最初から社会から排除された人間として描くことによつて、その理想像は純粹なものになり得た。他の主人公とことなり、フェランテ・パラの行動はすべて疎外からの回復に向けられている。光明はパラのところにだけあるのだが、時代の条件が彼を狂人にする。

(1) Martin Turnell ; The novel in France

Irving Howe, Politics and the novel.

(八)

エステティックの面から接近するにしろ、イデオロギーの面から近づくにしろ、フェランテ・パラの三つの側面（詩人、山賊、共和主義者）は理想像を形成するにせひとも必要であつた。この三つの条件を備えた以上、彼の時代にあつては狂人として取扱われる。三つの条件はスタンダールの内面においてきわめて密接につながっている。

古代の肉体的な力に対して近代の知性の力（＝勇氣）を対応させて考えていたスタンダールは、思想の力に非常な信頼をよせてい

た。それは近代の偉大な力としてスタンダールがボーマルシェを思ひ出していることからわかる。言論に生命がかけられていた革命的な状況では、人々はかえつて言葉の力に信頼をかけたのではないだろうか。スタンダールの詩人のイメージは「俗物どもの城市の内部にひそむスパイ」といった去勢された現代詩人のそれではなく、言葉の武器によつて闘う勇敢な詩人であつた。（パラの詩の標題『ラ……』は将来、議会と予算をもつことがあるだろうか？）に注意しよう。）

この時代、そのような詩人の例にこたくことはなかった。バルザックがまづ先にフェランテ・パラと比較し、またスタンダール自身がバイロンにあてた手紙で、スコットほどの才能はないとしても、最もやさしい最も情熱的な関心をうけるにふさわしいと書いたシルヴィオ・ペリコ。ペリコの「獄中記」と共にその手記をスタンダールが参考にしてファルネーゼの塔を書いたといわれる、アンドリアーヌ。メチルドの恋人であつたと云われる愛国詩人フォスコロ。ラ・フォンテーヌに匹敵するフランス最大の詩人であると同時に、民衆の最もすぐれたイデオロギとスタンダールがほめあげたベランジェ。etc.

勇氣とは正しく推理することである。人は正しく推理すればかならず共和主義者となる。従つて勇氣ある眞の詩人は共和主義者でなければならぬ。これがスタンダールの論理であるが、共和主義者の詩人はまた山賊でなければならぬ。

「……あなたのような才能のある人が生きるために盗みをしなくちゃならないなんて！

……私に少々才能ができたのは、多分そのためでしょう。今日まで世間で有名なこの国の文学者達はみな政府とか宗教界から金をもらっている連中です。はじめかれらはそれをくつがえそうと望んだのです。……」(二十一章)

パラの答は痛烈な皮肉であるが、我々の問題でもある。イタリア最大の詩人、パルムで唯一の真の共和主義者を狂人とし、山賊としたことは、アーヴィング・ホーが云うように、優れた政治的ウィットであつたかもしれないが、傍観者としてではなく、スタンダールなり、バラなりの位置に自分を置いてみれば、もつと切実な問題であつたことがわかる。スタンダールがあれば山賊によせた愛着は何故か。しいたげられた民衆が彼等の英雄、ロビン・フッドを創造していったと同じ理由が、そこには働いているのではないだろうか。

「中世の共和国がほろぼされた時、もつとも気概に富んだ共和主義者、大多数の市民よりも一そう自由を愛した連中は森林に身をひそめた。バリオーニ、マラテスタ、ベンティヴォリオ、メディチなどに苦しめられていた民衆は、もちろん、それに刃向う連中を愛し、また尊敬した。

山賊はこうした専制的小統治者をやつつけて、いつも成功するとは限らぬが、少なくとも彼等をからかい、彼等に挑戦した。それはこの機智に富んだ民衆には些末なこととは見えないのだ。

とても利口で、からかい好きなこの国の民衆はお上の検閲の下に出版される本など馬鹿にして、日ごろ愛読するのは名だたる山賊の生涯をばげしい調子で歌った小詩ばかりだからである。彼等がこうした物語のうちに見出す英雄的なもの、それが下層階級のうちにいつも躍動している芸術家氣質をうつとりさせる。」

(カストロの尼)

山賊はイタリアのロビン・フッドであつた。山賊に共感しているのはスタンダールのうちの共和主義者と芸術家の部分である。王政復古と七月王政を妥協によつて生きた連中、パルムのリベラルのような連中ではなくて、常に反逆者として扱われ、権力によつて死刑を宣告されたが、民衆の愛と尊敬によつて支持されているジャコバンを理想像とする共和主義者・英雄的なものに対する感動が、下層階級と共通の基盤をもっていることを確認した幸福な芸術家。山賊の物語のうちにスタンダールは、表面はどのように隔絶されていようとも、内奥において民衆につながる共通したものの存在を認めたのだ。

ロビン・フッド伝説において、権力者の圧制から民衆を救う英雄は、民衆の手によつて彼等に望ましいさまざまな属性、正義感、勇氣、陽気さ等々が与えられ理想化されていった。結局それは彼等が望んだ解放者であると同時に、彼等自身の理想像であつた。この過程を逆にたどることによつてスタンダールは民衆に近づく。

スタンダールの民衆とは、サンタンドレ寺院に集つたきたならしいジャコバン達である。彼がくりかえし述べている民衆の最も良き

部分とは何か。勇氣、エネルギー、自然らしき、祖国愛。このきたらしい民衆から「理想美」までの飛躍は実はロビン・フッドを媒介にしているのだ。そしてスタンダールのロビン・フッドはイタリアの山賊でなければならなかった。スタンダールは「現実の民衆」と「あるべき民衆」との矛盾をこのようにして解決しようとした。スタンダールのロマネスクはこのようにして生れる。ここにスタンダールの芸術の鍵がある。スタンダール自身もそれを意識していたのではなかったか。

「クリザールの生活を形成する現実とは、私の場合では、ロマネスクが代りになっている。私の望遠鏡中のこの曇りは、私の小説人物にとって有利であつたと思う。」(アンリブリュールの生涯9章)

ここからバルザックとスタンダールの本質的なちがいが説明されるのではないだろうか。そして同じように好意的に描かれた共和主義者の副人物が山賊とか強盗ではなくてきわめて現実的に推かれた場合(フーケ・コフ、ゴーチエ等)、何故スタンダールではそれほど魅力的ではなかったかが説明される。

スタンダールは彼が認めた民衆の最も良き部分をロビン・フッド的伝説をかりて再構成し、より一層高めたかたちで正しい方向、すなわち未来にむけてきし出そうとする。それがフェランテ・パラであった。階級的には民衆と切れており、「私は民衆を好み圧制者を憎悪するが、民衆と一諸に暮すのは大変苦痛だ。」(アンリ・ブリュール15章)と書いたスタンダールが民衆に接近するのはこのようなしかたである。

ミシュレが民衆から様々な美点を引出しながら、結局そこで止ってしまつたのにくらべても、ユゴーが一種の民衆の理想像のものを創造しながらも、ラムネー流の博愛主義に終つたのにくらべても、スタンダールは数歩進んでいた。しかも「民衆」も「レミゼラブル」も「パルムの僧院」よりかなり後の作品である。

- (1) Stendhal ; Correspondance W. le divan. P. 49.
- (2) Stendhal ; Courier Anglais, V. le divan, P. 39~63.

(九)

イギリスのロビン・フッドがすでに伝説にすぎなくなっているのに対して、イタリアの山賊には現実的な基盤があつた。中世のロビン・フッドは山賊は十九世紀初頭においては、カルボナール(炭焼党)として実在した。(この伝統は現代にも残っているらしい。例えばG・ベルトの「山賊」はスタンダールの「イタリア年代記」の山賊の物語の現代版である。)

スタンダールが積極的にカルボナールの運動に参加したという記録は残されていないが、カルボナリーとの個人的な接触はかなりあつたらしい。スタンダールは、一八二一年オーストリアの警察に炭焼党员との嫌疑をうけてミラノを去っている。一八二八年にも再び同じ理由でミラノを追放された。その翌年には「ヴァニナ・ヴァニニ」を発表した。この作品には「法王領において発見されたる炭焼党最後の結社に関する顛末」という副題がついている。祖国愛と恋

愛の葛藤を描き、炭焼党に対する深い共感をあらわにした素晴らしい短篇である。

炭焼党というのは最初イタリアに侵入したフランス軍に対する抵抗組織として生れた。黨員は山中にたてこもって炭焼のように生活したところから炭焼党と呼ばれた。ナポレオンの敗北後はオーストリー以下の専制勢力と戦うことになる。祖国の自由と開放を旗印として専制勢力に激しく抵抗した。勿論、秘密結社であって捕えられ、死を意味した。ペリコの「獄中記」には感傷的な筆致ではあるがイタリアの愛国者に対するオーストリーの官憲の残虐行為が描かれている。ファブリスがスピールベルクに対して抱いた恐怖は決して誇張ではない。

炭焼党の勢力は王制復古時代に急激に拡大し、イタリア各地で革命や反乱を起こしている。一八三一年、マッチャーニによつて作られた「若きイタリア」に吸収された。ヴィレールが首相となつた一八二一年、フランスにも炭焼党の組織ができしたが成功しなかった。

七月革命を経て、多数派となつたリベラルやブルジョワ化した共和派に対して、すでに希望を失つていたスタンダールは、厳しい専制の下でいまだ闘うことをやめないイタリアの共和主義者・愛国者に対してだけは激しい共感を感じていたようである。フェランテ・パラの存在はイタリアのカルボナールなくしては考えられない。

スタンダールにしてみれば、彼等だけがフランス革命の最も良き部分を守り、ナポレオンがイタリアに残した教訓を守つていた。

「幸福になるためには祖国を現実的な熱情をもつて愛し、英雄的な行為を求めねばならない。」（「パルムの僧院」第一章）オーストリーの圧制はかえつてイタリアの地にフランス革命の精神を最も純

粋に強烈な力もちで残すことになった。

フランスの七月革命が結局はいまいな妥協に終つたのに対し、七月革命がよびおこしたイタリア各地の愛国者達の反乱は厳しい弾圧によつて終つた。「パルムの僧院」と深い関係があると云われているモデナ公国の反乱は、そのうちでも最も成功した例である。モデナ公国の反乱は一八三一年二月三日、モデナの自由主義者の主領、メノッティの逮捕をきっかけとして起つた。五月にはフランソワ四世をマントヴァに退却させ、王の降位を宣言した。しかし勝利は一時的なものであつた。オーストリーが干渉し、三月二十五日、革命臨時政府は解体する。メノッティは処刑され完全な敗北に終つた。

メッテルニッヒによつて、危険人物としてトリエステの領事職を拒否されたスタンダールが、トリエステからチヴィタ・ヴェッキアの任地に向つたのはこの動乱がまだ完全にはおさまつていない三月三十一日である。ヴェニス、パドヴァ、フェラーラ、ボローニャ、フロレンス等を経てチヴィタ・ヴェッキアに着いたのは四月十七日。スタンダールは四月十一、十二、十三日付の至急便で外務大臣にかなりくわしい報告を送つて、動乱直後の現地の深刻な状況を伝えている。

「フェランテ・パラは民衆のたゞ中にいて、いつものように勇敢に荒れくるつていました」（二十三章）

C、デディアンは、ここでパラはメノッティの役割を演じていると書

いているが、² パラの行動にはこのような歴史的裏付があった。しかし「ここであつたことは一切抹殺されてしまった」のである。ここで我々は一七九六年と一八三一年の落差を感じるのである。「百姓家の門前で、その家の赤ん坊を揺りつつお守りをしたり、ほとんど毎晩のように誰か鼓手がヴァイオリンをひいて即席舞踏会を開いていた」幸福な解放軍の兵士達と、森の中に孤絶して、まったく勝目のない反乱に身を投ずる狂人の詩人とのひらきを。イタリア戦役の兵士とフェランテ・パラとの関係を、公爵夫人の召使の何気ない言葉が云いあてている。

「あの男はわたくし達のナポレオン、(Notre Napoléon) びいぎだつたばかりに死刑なんかいいわたされたのです。」(二十一章)

こうしてイタリアの狂気の詩人の物語は、読者を過去へ、スタンダールの輝かしい青春、イタリア戦役の時代へと誘う。スタンダールはフェランテ・パラという理想像を卑俗なブルジョワ根性が支配する七月王政や、おそらくはそれに続く共和制の時代よりも、遙かに遠い未来にむけてさし出したのであつたが、それはイタリア戦役から大革命にひろがる意外に広い眺望を含んでいた。

「(モスカが知らぬ顔をしていたら) 軍隊は民衆と提携していたでしょう。殺人と火災が三日間つづいたでしょう。それから十五日間の掠奪、ついに外国から二、三個連隊がやってくるまで鎮圧することになります。」(二十三章)

モスカの言葉はモデナの反乱を暗示している。これが現実的な正しい判断であり、歴史の現実であつた。それ故にフェランテ・パラは「内密に宣告しているという死刑を実施する」テロリストの面影をおびなければならぬ。だがスタンダールは、正しい判断を下したモスカよりは、狂人のパラの方を一段高いレベルの人間として描いていることを忘れてはならない。バルザック的確な表現を思う。

「崇高な共和主義者のドンキホーテ。」

スタンダールの理想像は、崇高なドンキホーテとして生きのびるか、あるいは短い充実した瞬間に燃えつきるかである。ミナ・ド・ヴァンゲルの結末にスタンダールは書いている。

「彼女の生涯は計算を誤っていたのだろうか。彼女の幸福は七ヶ月続いたのだ。生活の現実に満足するにはあまりにも熱烈な魂であつた。」

ここには、森や湖畔を一人さまよつて、「たゞひとりかのひとなくて世はすべて荒涼たり」とつぶやくのとは全く異つた孤独の表明がある。この不思議に充実感をともなった孤独は、スタンダールと他のロマンチックを区別する。

- (1) Louis Farges ; *Stendhal Diplomate*, Pion.
- (2) Charles Dédéyan ; *Stendhal et le Risorgimento dans la Chartreuse de Parme* (*Revue de Littérature Comparée*, 1952, P.181)

この小論の目的は、スタンダールの優れた理想像であるフェランテ・パラを、ロマン主義の文学、とくに一八三〇年以後に文学においても大きな関心事となった民衆との関係によって捉えることにあり、最もスタンダールのなものを探ることであつた。

スタンダールが民衆を主題とする人道主義的な文学運動に参加したのは非常に特異な形式によつてであつた。スタンダールはこの運動の虚偽とブルジョワ的な部分に激しい反感を示しているが、民衆に対しては無関心であつたわけではない。

フェランテ・パラはスタンダールのロビン・フッドである。スタンダールはロビン・フッド的人物を描くことによつて、現実の民衆とあるべき民衆との矛盾を一気に解決した。何故ならロビン・フッドはあるべき民衆、理想的な民衆像であるが、それは現実の民衆が熱望した解放者、彼等の英雄であると同時に民衆自身の美徳を一身に備えた民衆によつて創造された人物であつたから。フェランテ・パラはスタンダールの尖鋭な民衆的な部分を代表している。

ロビン・フッド的人物を描くことはロマン主義時代の流行であつた。この時代のロビン・フッド的人物にたいする関心は、パラに寄せるバルザックの特別な興味からもうかがわれる。スタンダールが他のロマンチックなこととなるのは彼が自己のロビン・フッドをイタリアの山賊に見出し、それを一八三〇年代のイタリアの現実結びつけたことである。カルボナリに対する共感にフェランテ・パラの創造には強く働いている。

「パルムは二ヶ月のあいだ共和国になつていたのでしよう。詩人のフェランテ・パラを独裁者にしてね。」(二十三章)

せいぜい二ヶ月の共和国。スタンダールが現実にかけた期待というのはこの程度のものであつた。「だって、この国で共和制がちゃんと行われるには、まだ百年もかかりますから」とモスカは云うのである。この正しい予言はスタンダールの現実認識の基本をなしている。「時は近づいている」と叫ぶことのできたラムネー、民衆の代弁者をもつて自から任じて博愛の歌をうたい続けたミシュレ、民衆の声に皮肉なあいさつを送りながらも、「ブルジョアジーの有為転変の壮大な詩」を生涯あくことなく書き続けたバルザック、これ等ロマン主義者の民衆とスタンダールのそれは全く異なつたものとなつた。フェランテの孤立はスタンダールの孤独の表明である。スタンダールは孤立することによつて自己の青春であるフランス革命を守りとおす。

しかし、スタンダールがフェランテ・パラを描き、それがこれほどのリアリティを持ちえたのは、背後に民衆を主題とする文学運動の高まりがあつたからである。スタンダールとバルザックやユゴーとのちがいは、この文学運動の流れの中で生長することによつて偉大になつたか、その運動をテコにして、そこから飛躍することによつて偉大になつたかのちがひである。しかし人は自分のおかれた時代を越えて無限に飛躍することはできない。フェランテ・パラが副人物にすぎないのはそのためである。